

中野区のおいたち

～原始時代から中野区の誕生まで～

原 始

旧石器時代、すでに、妙正寺川、江古田川、中野川（桃園川）、神田川の現在の区内にあたるところには、人びとが住みつくようになっていました。

縄文時代には、集落をなして竪穴住居に住み、狩猟生活を営んでいました。当時の遺物、遺跡は、区内で数多く発見されています。昭和 59 年 10 月にも、北江古田公園から、多数の石器や土器などが出土しました。

古代・中世

大化の改新後、中野を含む地方は武蔵国と呼ばれ、現在の府中市に国府が置かれていました。

奈良時代に入り、郡郷制が確立すると、中野は多摩郡となりました。雑色が小島郷に、中野、本郷、上・下沼袋、上・下鷲宮、江古田、片山、上高田が海田郷に属したといわれています。

10 世紀に入ると、全国的に武士の抗争があいつぎました。天慶の乱（939 年）では、平将門の弟と藤原秀郷の子の合戦が中野で行われ、将門の弟は、今の中野 1 丁目（城山町）付近で討たれたと伝えられています。

室町時代の中頃、文明 9 年（1477 年）に、のちに江戸城を築いた太田道灌が武蔵野の豪族の豊島氏と江古田、沼袋で合戦し、これを破りました。江古田公園には、古戦場碑が建てられています。

近 世

江戸城築城の際、石灰を青梅から江戸まで運ぶために、幕府は青梅街道を新設しました。中野村はこの街道の宿場となり、往来も多くなりました。その後、この街道を通る人びとを相手にする店や、みそ、しょう油、そば粉を扱う店が盛んになりました。

江戸が発展してくると、近隣地域は江戸市民の台所を賄う穀物、野菜の供給地となりました。中野でも、雑穀や野菜を中心に、農作物の生産が急速に増えました。

このころ中野は、中野、本郷、本郷新田、雑色、江古田、片山、上高田、新井、上・下沼袋、上・下鷲宮の 12 か村に分かれていましたが、なかでも中野村は、元禄のこ

ろ2,000石を超えたとされています。

貞享年間、5代将軍綱吉が「生類憐みの令」を出し、今の中野駅を中心に、28万坪の広さにおよぶ犬小屋をつくらせました。また、中野は将軍のお鷹場となり、無断で鳥類を捕えることが禁じられました。

8代将軍吉宗は、現在の中野駅の南側一帯に桃の木を植え「桃園」と呼ばせ、江戸の名所となりました。

近代

明治22年(1889年)4月に施行した「市制及び町村制」により、中野・本郷・本郷新田・雑色村が合併して中野村に、江古田・上鷺宮・下鷺宮・上沼袋・下沼袋・新井・上高田が合併して野方村になりました。

また、同年には新宿、立川間に甲武鉄道(現在のJR中央線の前身)が開通、区内に中野駅が開設されました。この鉄道の開通により、中野村では人口も増え、近郊住宅地として発展していき、同30年(1897年)には中野村から中野町となりました。

一方、大正12年(1923年)、関東大震災は、山の手への人口移動に拍車をかけ、中野においても、人口が急増し、大正13年(1924年)には、野方村も野方町となりました。

昭和2年(1927年)、村山線(今の西武新宿線)が開通しました。

昭和7年(1932年)には、東京市の市域拡張にともない、中野町と野方町が合併して中野区が誕生しました。